

3. 調査c) パイロット事業<来場者調査・関係者調査>

(1) 来場者調査の結果

①北方領土問題への認知度

- ・パイロット事業4地点（広島、栃木、山形、愛知）とともに、北方領土問題について8割以上が認知している。4地点共通して女性よりも男性の方で認知が進んでいた。

②「北方領土情報ブース」で参加・接触したもの

- ・「クイズラリー」との接触が共通して8割以上と目立っていた。
- ・「エリカちゃん」との対面は、広島では28.5%と高かったものの、栃木、山形、愛知では低い値にとどまった。共通して「フォトセッション」での記念撮影は1%以下となっており、写真を撮る対象として認識されていなかった。

③「北方領土情報ブース」に参加した印象

- ・「北方領土に対する理解が進んだ」との回答が共通して約4~6割以上と高く目立っていた。これは、ブースで開催したクイズラリーのパネルなどを通じて、「これまで知らなかった北方領土のことを知ることができた」といった程度の理解も含まれていることが考えられるため、留意が必要である。
- ・共通して女性よりも男性で「理解が進んだ」と回答が目立っていた。

④「北方領土情報ブース」の内容拡散意向

- ・「家族に伝える」と回答した人がどのパイロット事業でも共通して高く、次いで「友人・知人に伝える」が高かった。一方、「SNSに投稿する」との回答は低調で、各地域ともに数%にとどまっている。
- ・広島では、20代・30代で「SNSに投稿する」と回答した人が10%以上おり、他のパイロット事業に比べて割合の高さが目立った。
- ・栃木では30代女性において「誰にも伝えない」と回答した人が他層に比べて高かった。
- ・山形では「SNSに投稿する」の項目は、10~30代とともに50代の女性でも数値が高かった。
- ・愛知では、30代~50代で「家族に伝える（電話・口頭・メールで）」の項目が高い傾向にあった。

⑤北方領土問題の関心内容

- ・「北方領土問題の歴史・問題の経緯」に対する関心がいずれのパイロット事業でも共通して高かった。今回、クイズラリーでは、歴史、自然、元島民、北方領土の日など、幅広いテーマの問題を用意した。
- ・広島では、男性が「ロシア人の北方領土問題の捉え方」、女性が「元島民の体験談」とそれぞれ割合が高かった。
- ・栃木では、30~40代女性において「北方領土の歴史・問題の経緯」について他層と比較し数値の高さが目立った。
- ・山形では、「北方領土の歴史・問題の経緯」については、60代の関心が他年代と比較し数値が高かった。

- ・愛知では、性・年代別にみると、30代女性が全体的に数値が高く、北方領土問題に対する意識の高さが表れていた。

⑥パイロット事業（参加プログラム）の取組みに対する評価

- ・広島では「わかりやすかった」「勉強になった」「興味をもった」という好意的な評価が目立った。
- ・栃木では、「早く返還してほしい」という「北方領土に対する思い」に関して回答した人の割合が高く、特に60代以上で目立った。
- ・山形では、「早く返還してほしい」という意見が最も多く、特に70代以上の世代から多く挙げられていた。
- ・愛知では、年代で比較すると、70代以上で、「大変興味を持った」の回答が5割を超えていた。

⑦北方領土問題への興味度

- ・啓発活動を通して北方領土問題に興味を持った（大変＋多少）人は、9割以上と高かった。
- ・男女で比較すると「大変興味を持った」と答えた男性は、女性の約2倍以上と目立った。各地点において、男性来場者が北方領土問題について、ブース関係者と話すシーンも数多くみられ、この問題について、男性の方で関心が高いことがうかがえた。

⑧ラジオCMの認知度

- ・「北方領土情報ブース」出展のラジオCMの認知度は、「認知していた」割合が低かった。
- ・若者層での認知度が低かったものの、70代以上では約5割が「ラジオCMを聞いた」と回答した。

（2）関係者調査

①これまでの北方領土問題の認知・理解状況

- ・北方領土問題があることを認知していた程度で思い入れが無いという意見だった。（広島）
- ・一方地元に北方領土との所縁がある点や、県民会議が長年所属していた等、北方領土問題への認知・理解は一定程度ある状況だった。（栃木・山形）

②パイロット事業に協力した理由

- ・広島では、通常民間企業からのブース出展は断っているものの、今回は内閣府からの正式な依頼であったためブース出展に協力したことだった。
- ・栃木では、担当者が県民会議に関わっていたため、パイロット事業に対しても協力的だった。
- ・山形では、パイロット事業の内容がスタンプラリーや景品があること、マスコットキャラクターが登場するなど、イベントにプラスになるという判断から積極的に協力姿勢へと至った。
- ・愛知では、「北方領土啓発事業」の趣旨に共感して協力姿勢へと至った。

③パイロット事業に対する評価

- ・栃木と山形、愛知では共通してパイロット事業に対して肯定的な評価を示した。
- ・景品であるエコバッグやクイズラリーに対しての評価が特に両者で高く、子どもからお年寄りまで気軽に参加できる点が肯定的な評価の理由だった。
- ・マスコットキャラクターのエリカちゃんが、「北方領土情報ブース」への集客に役立っただけでなく、イベント自体への賑やかさにつながったという肯定的な評価を示した。

④今回のようなプログラムに対する今後の協力意向

- ・パイロット事業4か所の担当者ともに、主催者単独で「北方領土情報ブース」を出展することは、人員的・時間的・金銭的な観点から対応が難しいという見解を示した。
- ・「場所だけ提供することは可能」（広島）という意見や、「現場の運営や北方領土問題を説明する人がいないと困る」（栃木）という意見があり、県民会議など当日までの準備や当日の運営を実施する主体があれば協力することが可能との意見が示された。（栃木の主催側担当者は県民会議での活動経験があったため、上記の発言がなされたと推測できる）
- ・愛知でも同様に、「場所を貸すだけなら協力する」という姿勢だった。
- ・一方で「北方領土問題情報ブース」を主催者側が展開することで、イベント自体に対して国から広報等何らかの支援が受けられるのであれば、検討することも可能との意見が示された。
- ・山形では、自治体が北方領土問題を積極的に展開することの判断が難しいが、他の自治体で北方領土啓発事業の前例が多くなれば、開催も検討することができるかもしれないという意見を示した。